

本県を代表する良質米の産地大曲・仙北地域にある美郷町六郷地区。平成10年、高生産性地域農業の確立に「六郷カントリーエレベーター」を建設。その付帯設備として導入された自動もみ殻炭化装置で生産される「もみ殻くん炭」は、良質米づくりのため地域に還元されています。

食味の良い良質米生産のため地域に還元される「もみ殻くん炭」(美郷町)



六郷カントリーエレベーター全景

生産性の高い地域農業の確立にカントリー建設

古くから本県を代表する穀倉地帯で、食味のよい米「秋田せんぼく米」の産地として名をさせてきた広大な仙北平野に囲まれた大曲・仙北地域。平成の時代に入ると、日本の農業を取り巻く情勢が新食糧法施行などにより、稲作物は大幅な自給緩和による米価の低落、さらには全国的な米の豊作が続き、生産調整の拡

大がなされるなど農業経済が一段と厳しい状況となりました。

この地域も例外ではなく、これらの深刻な課題を乗り越えるために、農業機械化過剰投資の抑制や農地の利用集積担い手農家や営農集団の育成、低コスト稲作の実現など、生産性の高い地域農業の確立を目的に、平成10年9月旧六郷町に建設されたのが「六郷カントリーエレベーター」です。(平成16年11月、六郷町・千畑町・仙南村の三町村が合併して美郷町が誕生)

もみ殻の有効利用のため「もみ殻くん炭」を製造

このカントリーエレベーターは、平成10年4月に大曲・仙北地区の20JAが大同広域合併し、米取扱量日本一となった「JA秋田おほ」と、奥羽山脈からの地下水が清水となつて町のいたるところか



自動もみ殻炭化装置



ら湧きだし、国の名水百選の里として名が知られている旧六郷町(現美郷町六郷地区)が建設に向けて取り組み、国の補助事業「地域農業基盤確立農業構造改善事業」を活用して総工費10億円を超える巨費を投じて建設されたものです。

敷地面積9800㎡、機械棟1100㎡、総もみ処理量3000tで、特徴的なのはカントリーエレベーターで、もみすり時に出るもみ殻の有効利用を図るため「もみ殻くん炭」を製造し、土壌改良材・育苗用土の補助資材として活用することを目的に、県内で

2カ所(他に鹿角市)しかないという「自動もみ殻炭化装置」が設置されています。

この装置は、もみ殻保管室・炭化装置・排煙装置により構成されていて、もみ殻の炭化時に発生するもみ殻カス

を燃焼させ、熱として加熱炭化)するため、加熱のための燃料が不用である、いわゆる着火時以外の燃料が不用なことが特徴です。



「もみ殻くん炭」

また、800~1000度の温度で完全燃焼させるため、くん炭に生育障害となるタール分を残さないほか、公害の原因となる黒煙、煙臭も発生しません。さらには、もみ殻を必要としません。

毎年もみ殻全量完売、年間40万リットルの販売量に成長

「自動もみ殻炭化装置」は現在、1日一袋100リットル(約15kg)の製造量を70袋(7000リットル・約1050kg)程生産しています。一袋5000円で、市販の大手の物の半額近い値段販売でされています。同施設で発生するもみ殻ほぼ全量がくん炭として利用されていますが、毎年全量完売しています。

販売量はカントリーエレベーターの稼働率に比例して伸び、取り組み初年度の平成10年は稼働率50%前後で20万リットルでありましたが、平成16年度には35万リットルと年々増加して、稼働率100%ととなった平成17・18年度には、年間40万リットルの販売量となっています。

良質米生産のため地域に還元されるもみ殻くん炭

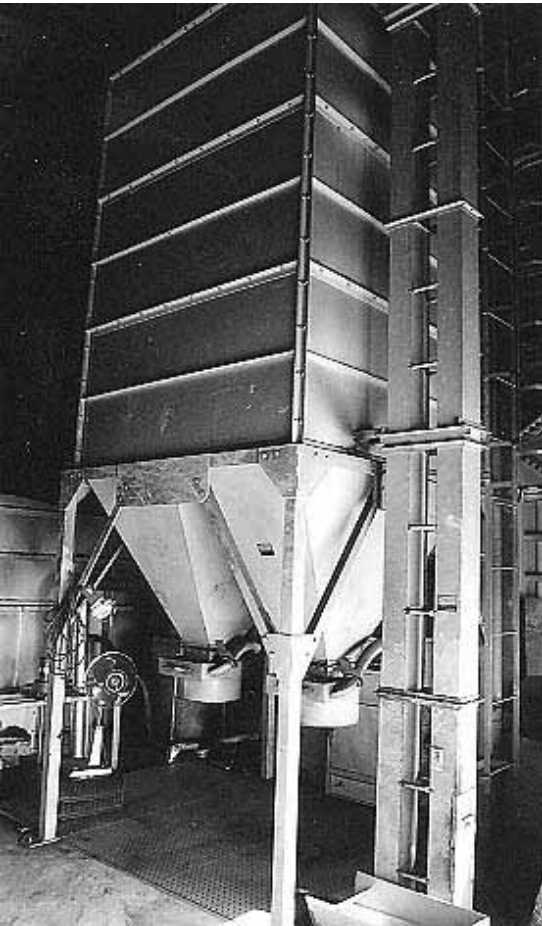
もみ殻くん炭は、多孔質で通気性・保水性に富むことから、土壌微生物の増殖が活発化され、土壌改良効果や連作障害防止効果が高いとされています。特に、水稻の育苗床土に混ぜることで苗類(タシ)が軽量化され、作業労力の軽減により高齢化農業に優しく

さらに、苗の根張りが良くない良質の苗を作ってくれます。また、雪の上に撒くと太陽熱を吸収して消雪を早める効果があり、雪が多い年には需要が多くなるといいます。

くん炭製造作業は、12月から翌年の7月末頃まで続きませんが、最も需要が多いのが春先の稲作農家の苗床作りの時期で、全体の8割近くがこれに消費されます。

一袋500円で年間4000袋というところで採算面では厳しいところですが、ここで生産されるもみ殻くん炭は、美郷町六郷地区を中心に食味の良い良質の米づくりのため地域に還元されていると言っても過言ではありません。

今後のもみ殻くん炭を活用した取り組みに注目するところです。



製造されたもみ殻くん炭は、この製品貯留タンクに一時貯留され、下の袋詰め口より100リットルの袋に詰められ製品となります。